

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

川崎医療福祉学会 第30回研究集会（講演会）

日時：平成18年6月14日（水）14：00～15：25
 場所：川崎医療福祉大学 10階 大会議室

講演要旨

医療福祉と防災

川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科 教授 大戸 寛

はじめに、昨今の建築に関する事件、事故に遭遇し、自戒をこめて2000年前のローマ時代の建築家 B.C 28年 ヴィトルヴィウスが著した「建築十書」について紹介します。

「願わくば、建築家は文章の学を理解し、描画に熟達し、幾何学に精通し、多くの歴史を知り、努めて哲学に聞き、音楽を理解し、医術に無知でなく、法律家の所論を知り、星学あるいは天空理論の知識をもちたいものである。」つまり建築学はいろいろな学問を統合したものであると同時に「人の命」や「社会的な使命」を持つ職業であるということを知覚しなければいけないと思います。

なぜ医療福祉と防災か？ということについては WHO2001「ICF」国際生活機能分類にみられるように「今まで医療福祉に関しては、医学モデルとして心身機能・身体構造に関することが研究の中心であったが、高齢社会の進展にともなって、社会モデルとしての環境因子である建築関連、災害等についても今後は、関連させて研究していく必要がある。」ということを示している。

わが国の高齢化は65歳以上の人口比率が7%に達した昭和45年(1970)から始まったとされる。比率が14%を超えると「高齢社会」、21%を超えると「超高齢化社会」と呼ばれる。昨年9月には20%を突破した。

高齢社会の到来により疾病構造が変化し、認知症や血管障害の増加が見込まれる。防災の観点からこれを読み解くと、火災や転倒、骨折事故が増加し、災害時の避難困難度が增大するということになる。また核家族や単身世帯、独居老人が増え、地域コミュニティが崩壊し、犯罪の増加や子育ての困難化という問題も抱えている。

最近の事件や災害はアスベスト問題、耐震構造偽装問題、エレベーターやシャッター事故等、人災の要素も大きい。耐震性能に関して建築基準法では過去2回改正されているが、改正以前に建てられた建築物はいちいち直さなくても良い(既存遡及しない)ことになっている。ただし、小学校は幼い子供の生命を守る観点や、災害時の避難場所でもあることから、耐震診断を行い新基準に合わせて補強するのがルールとなっている。それにも拘わらず、全体の数10%しか耐震補強を実施していない市町村も発表されている。事が起れば、再び人災が問題となりそうである。政治、経済、福祉、文化の優先順位を遅滞無く実行できる国になりたいものである。

建築の構造設計においては1981年以降、新耐震設計法(新耐震)にのっとり行われている。阪神淡路大震災の大きな被害の中において、新耐震による建物はほぼ倒壊を免れた。ところが、ビルは残っても壁や天井が崩落し、家具が倒壊し、生命や財産を奪った例が多々あり、その反省から免震構造や制震構造が増えている。わが国では古人の知恵として「五重の塔」の心柱しんばしらのしくみが免震構造や制震構造となっていることが最近証明された。

また、凡そ高さ100mを超えると、地震力よりも風力のほうが建物に与える影響が大きくなる。高層の建物を丸くするのは単にデザインだけではなく風をいなすためでもある。コンクリートで覆われた都市においては台風、集中豪雨による浸水被害対策のため排水路の整備、調整池、地下ダムなどの工事が大都市中心に盛んに行われている。また過疎地型水害の防災技術としては砂防ダム、崖地の回避などの対策があるが、森林の保全が根本的な対策になるといわれている。

長崎における今冬のグループホーム火災のように火事は高齢者にとって非常に危険な災害となる。高齢者施設においては不燃化、耐火性能向上、消火設備、避難しやすさなど特に求められる。「人にも地球にもやさしいデザイン：ユニバーサルデザイン」の考え方においても①安全であること ②アクセスしやすいこと ③使いやすいこと ④経済的妥当性 ⑤美しいこと というように「安全」が一番に定義されている。

設計事例として、最近完成した八尾市民病院を紹介する。わかりやすいレイアウトとサイン、避難と省エネ、リハビリスペースや癒しをかねた低層部の屋上庭園など市民に親しみやすい病院としているが、防災面からは免震構造や外周バルコニーを採用している。

21世紀の「健康と安全の課題」としては、子供やお年寄りにやさしい街作り、災害に強い住環境、地域コミュニティの再構築が急務であろう。